

<今回>384回目 2025年12月22日(月)14時10分～17時 603会議室

読書は3冊目「盗まれた神話」ミネルヴァ版 p112 宙に浮いた史書

<前回>第383回目(25-12-8)出席者9名

資料1)第382回(25-11-24)のまとめ(清水)

資料2)第77回正倉院展報告(高山)

A 報告

資料2)高山氏から配布された第77回正倉院展の報告が A3資料(裏表)を基に、丁寧に紹介された。彼は3回目、蘭奢待が展示品に入っていたので参加したという。毎回展示品は異なる。展示資料は67個、24番桑木阮咸は4弦の琴、竹林の7賢人を描いている。26番の天平宝物筆は大仏開眼の最後に眼を書き入れた筆という。どうやって書き入れたのか、楽しく想像図を書いていた。39番の勅書銅板は用字から平安時代の物、12番の投壺は韓国製で矢を投げ入れて入るかどうかを競う遊び用具、聖武天皇らが遊んだか。47番牙笏は象牙製、56番の正倉院古文書正集の第四十卷(豊前国中津郡丁里戸籍)写経の裏紙使用例で有名(これらによると1戸は数十名の例もある)。瑠璃はガラス製品、最後に10番「黄熟香」は香木の蘭奢待のこと。織田信長らが切り取ったという香木、切り取り箇所にも名前が3か所書いてあるが、切り取った箇所は50箇所もある。蘭奢待には東大寺の文字が隠されている。全長1.5m、唯C14で測ると9世紀ごろ、と出ているそうである。展覧会会場図等会場で配られた資料で面白く楽しく紹介していただいた。

私は筑紫舞の前文に正倉院の「之良技古土」のエピソードがあり、2面の琴が貸し出されて、後の数日後に返却されたが琴は別の物だったと貸出帳にあるそう。弦は12弦、唐は13弦、南朝は12弦、白石太一郎は東北大学にいた時代に味噌樽の蓋の紙の裏紙の研究で東北の柵や砦の研究を発表していた。

正倉院は国宝だが中身は皇室の私物扱いになっている建前である。九州久留米の小郡に正倉院とそっくりの柱跡が出てきた。そこから奈良時代に大量の献物があつたという。高橋遺跡。

読書 ミネルヴァ版 P110「帝王本紀」の存在。 から 今回は読書

①宙に浮いた史書 天武10年3月 帝紀及び上古の諸事を定めよ、とある。帝王本紀＝帝紀と見なして日本書紀の前にあつた文(歴史書)と見なすことは出来ないか。古事記にはこれを書く経緯が書かれている(前文、全文漢文)。

②古事記には稗田阿礼に誦習させた。それを太安麻呂が記録した。(外東流三郡誌の語り部の例からありうるかもしれない)素人の目には疑いのない理解だと古田はいう。

③研究者の理解は逆である。古事記序文の一節をとり、日本書紀に2回出てくる帝紀を同じ意味と理解して、単なる天皇系図と見なした。

④そのため日本書紀の欽明紀の2年の注記で帝王本紀が既に存在して、それを基にして日本書紀が書かれているので帝王本紀が宙に浮いて実体不明の辞(ことば)になってしまった。(帝王本紀が宙に浮いた事実になっていると古田先生は理解した。)

第386回2026-1-12(月)15時10分から18時まで603会議室 時間注意

第387回2026-1-26(月)14時10分から17時まで602会議室

第388回目 2-9(月)14時10分から17時まで601会議室